

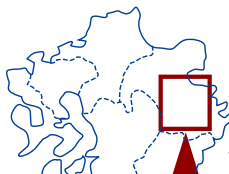
奥豊後路を探訪

緑の山野に急峻な溪谷が刻まれた美しい郷土



5 細長橋 ほそながばし

JR九州の久大本線と豊肥本線に囲まれて広がる奥豊後路は、豊かな森林と耕地に恵まれた美しい故郷です。豊後の鶴崎と肥後の熊本を結ぶ豊後街道が、その中程を貫きながら、歴史の歩みと懐かしい情趣を今に伝え、大野川をはじめとする幾多の河川が大地を潤し、多彩な産業と暮らしの基盤を強固に支えています。



大分県(由布市・大分市・豊後大野市・白杵市)



優美な開腹アーチ橋

JR九州の久大本線小野屋駅から国道210号に出て西へ向かい、県道30号を南へ。途中で県道618号に移り、谷へ下ると竜原橋^{たつはる}1に出会います。兩岸を緑に彩られた芹川に架かる鉄筋コンクリート造りの雄大なスケールのアーチ橋です。完成は昭和8年(1933)。橋長49.4mの桁を支える部材は、隙間を開けたオープンスパンドレルアーチであり、高欄に施されたアーチ状の開口部の連続とともに優美な姿を見せています。現在でもほとんど傷みもなく存続し、現役の道路橋として地域の交通と生活を支えています。

一念発起で水路を開削

急峻な山間地が広がる野津原地域は、古くから水不足に苦しみ、米の収穫が乏しいため、領民は大変に貧しい暮らしを強いられてきました。肥後藩谷村手永の惣庄屋・工藤三助は、村人を苦難から救済するために一念発起し、谷村に水路を引く計画を立案します。以後、水源探しから測量作業まで奔走し、元禄12年(1699)から享保9年(1724)にかけて大龍・世



1 竜原橋 たつはるはし



大龍井路おたついる



堤子井路ひさごいろ



世利川井路せりがわいる

2 野津原三渠 のつはるさんきよ



3 今市石畳 いまいちいしだたみ



4 (旧)犬飼橋 (きゅう)いぬかいはし

ひさご のつはるさんきよ
利川・堤子の石張水路・野津原三渠 2
を掘削完成させ、広大な新田開発を実現したのです。

藩政時代の野津原地域は肥後藩領ですが、三水路の流域には府内藩、岡藩、天領の直入村の領地が入り組み、政治的に緊迫した関係にあったため、他藩の者が水路を開くのは難しい状況でした。

しかし、工藤氏はねばり強く折衝を重ね、幾多の難題を乗り越えて掘削に着手。当時の技術は薪炭で熱した岩盤を、水で急冷して除去する原始的なものでしたが、難行苦行の末、14.963kmに渡る水路を掘り抜き、三百余町歩の田畑に灌水することをかなえたのです。こうした多大な功績により、工藤氏は郷土の先覚者として人々に慕われ、今も尊崇を集めています。

由布市役所の西側、県道621号を南下し、直入方面へ左折して進むと、大龍井路開削記念館があります。その裏手には周囲の田園地帯を縫うように、豊かな水量を誇る大龍井路が流れています。また県道618号を挟間方面に走ると、右側の山手に堤子公園があり、いくつもの石碑が立つ傍ら、林間を抜けて流れる堤子井路が見られます。

さらに、県道690号と県道412号の合流点の北西には「野津原三渠碑」が立て

られ、工藤氏の業績が詳細に刻印され、讃えられています。この石碑の上手の山を少し登ったところには、世利川井路の清流が緑の木々の間を静かに流れています。こうした水路は三百年を経た現在まで、地域の人々が代々補修を続け、機能を実実に維持していることも驚きの事実と言えます。

幕末の元治元年(1864)、勝海舟は坂本龍馬と豊後街道を旅したとき、この碑を仰ぎ見たと「海舟日記」に記しています。

豊後街道に残る石畳

県道412号を南に向かうと、右手に「岡藩今市宿場跡」の石碑が現れ、その奥に今市石畳 3 が伸びています。この道筋はかつて岡藩中川氏と肥後藩細川氏の参勤交代に使われた豊後街道の一部です。道幅8.5mのうち中央部分2.1mに平石がびっしりと敷き詰められています。石畳の全長は660m。全国的にもこれだけの規模で石畳が残るのは稀であり、県の重要文化財に指定されています。

この石畳は宿場の中央で2回、^{かぎ}鉤の手に折れ曲がる、いわゆる「信玄曲がり」の形状で、宿場内が見通せないよう工夫されています。宿場は岡藩が文禄3年(1594)に築いたもので、当時、石畳の両側には本陣、脇本陣をはじめ、茶屋、宿屋、

代官所、酒造屋などが軒を連ね、物資や旅人が行き交う交通の要衝として近郷随一の繁栄を見せたと言われています。

陸路と船路の結節拠点

大分県の一級河川・大野川の中流域、豊後大野市の犬飼町に架かる(旧)犬飼橋 4 は、国道10号と県道631号を結ぶ、鮮烈なブルーが印象的な鋼製道路橋です。斜材の向きを交互に組み合わせたワーレントラス橋であり、4段になった井桁状の橋脚は、なかなか見ることでできない独特な形状です。竣工は昭和9年(1934)であり、トラス部材は日本製だと伝えられています。

この犬飼町は江戸時代、岡藩中川氏が川港として整備したものであり、物資輸送ではここより上流は陸路、下流は船路とされたため、物流拠点として大いに栄え、参勤交代や商人、旅人でにぎわっていたということです。以前は国道57号であったこの橋は、上流に新しく犬飼大橋ができて以降は県道となりましたが、今でも現役で機能を果たし、地域に貢献しています。

この犬飼大橋を渡る国道326号を南下すると、大野川と三重川の合流点の近くに細長橋 5 があります。完成は昭和6年(1931)。橋長は115.1mもあり、伸び



6 虹澗橋 こうかんきょう



7 (旧)明治橋 (きゅう)めいじはし

やかな印象です。左右のトラス構造の上部が連結されていないポニーワーレントラス橋であり、明るいオレンジ色が洒落です。橋梁を支える石造りの巨大な橋脚は5段構造で、どっしりと重厚感にあふれています。この細長橋の周辺は、かつて大野川の船着き場として繁栄していた歴史があるそうです。現在は老朽化のため、通行止めとなっています。

虹のようなアーチ橋

国道326号をさらに南下し、「道の駅みえ」を過ぎて国道502号へ左折します。そして新虹澗橋から左に曲がると、三重川の深い谷間に、見事なアーチ形状を見せる虹澗橋 **6** が姿を現します。江戸時代、石高一万石とも言われた三重郷は有数の穀倉地帯であり、大量の年貢米がこの川を越えて白杵城下へ運ばれていました。

しかし、増水時には水難事故が絶えず、数多くの人命が失われていたそうです。この惨状を憂慮した白杵藩内の3人の豪商が築造資金を抛出。着工後3年6カ月もの歳月をかけ、文政7年(1824)に完成します。橋長31m、支間25.2m、拱矢

11.2mという堂々たる石造アーチ橋は、それまでの規模をはるかに超え、建設当時、日本一のアーチ径間を誇るものでした。しかも、このような深い谷地形に架橋されることは全国的にも稀であり、近世アーチ橋の先進地である九州においても、その頂点に位置づけられるほど高い技術水準で築造され、国の重要文化財にも指定されています。この虹澗橋という橋名は、「谷に架かる虹」という意味だそうです。しかし、現在は劣化のため、歩行者のみの通行に制限されています。

国道502号に戻り東へ進み、国道10号との交差点を左折すると、すぐに野津川に架かる(旧)明治橋 **7** が現れます。完成は明治35年(1902)。橋長32.5m、幅員5.4mの赤黒く錆びた姿には、歴史と風格が漂います。建造当時の大分県では石橋が主流でしたから、鋼桁橋を採用したこの橋は、イギリスからの輸入鋼材で造られたものと考えられます。現存する道路用鋼桁橋としては国内で2番目に古く、また波状鋼桁にコンクリートを充填する合成床版では、日本最古のものと言われています。上流側に新明治橋が架け

られてからは車の通行が禁止され、歩行者専用として利用されています。

この地域では国道442号沿いに、地元の旬の農産品のほか、ジビエ料理を提供する「道の駅のはる」、国道57号沿いに、野菜や椎茸、総菜などの特産品が充実した「道の駅おおの」、国道326号沿いに、野菜や果物が豊富にそろい、レストラン街やドッグランスペースも備えた「道の駅みえ」があり、旅の土産品もあれこれ楽しく選べそうです。

土木遺産 in 九州のホームページアドレス
<http://dobokuisan.qscpua2.com/>



道の駅「のはる」



道の駅「おおの」



道の駅「みえ」

宮崎県で点在した土木遺産も探索—日本最古で、現役の験潮場



宮崎県の日向市街から県道23号を細島港に向かい、「海の駅ほそしま」の前を過ぎると、左手に細島験潮場が見えてきます。日本での潮位測量は明治5年(1872)、利根川河口に設けられた量水標が始まりです。この細島験潮場は明治25年(1892)、陸軍省参謀本部陸地測量部の施設として竣工。しかし、基礎部分の木材が劣化して崩壊したため、翌年、基礎に石材を用いて再建されました。

この験潮場は現存する日本最古のものであり、現役として潮位観測を実施している施設です。

Another 土木遺産 in 宮崎

